

第8回日本時間生物学会山口大会の報告

井上 慎一

(山口大学理学部)

日本時間生物学会の第8回学術大会を山口で開催するに当たり、多くの先生方にご協力をいただき、ありがとうございました。おかげさまで、大変実りある集会となり、責任を全うすることが出来ました。いたらぬ点は多かったと思いますが、その点はどうぞご容赦ください。

この大会は山口大学時間生物学教室の井上慎一を大会長、富岡憲治を副大会長として、2001年11月14日、15日の両日山口市の山口駅前ばるるプラザ山口を会場として行われた。山口県は本州の西の端で、必ずしも交通の便がよいとは言えない土地にあるので、東京や大阪の大会のように人が集まるかどうか、我々は心配していたが、参加人数は200人を超え、前回の東京大会に匹敵する人数が参加してくださり、まずまずの盛会であった。今年は、生物時計をテーマとする国際シンポジウムなどが何回か日本で行われたこともあり、とりわけ基礎系の参加者数の減少が懸念されていたが、杞憂に終わらせることが出来た。

さて、今年は原点に戻って、特に会員の研究発表を中心に学会のプログラムを構成した。シンポジウムは臨床系2題、基礎系2題として、どちらのシンポジウムも同じ会場で行うようにして、臨床の先生が基礎の話を、基礎の研究者が臨床の話を聞きやすいように配慮した。そのほかに山口大学に新たに設立された時間学研究所との共催で、時間を哲学や社会

学のテーマとして研究している時間学研究所所員の講演による公開の特別セミナーを企画した。それは、「時間について考えよう」と題し、哲学の入不二基義氏と、社会学が専門の辻正二氏にそれぞれ専門の中で、時間について研究している内容をわかりやすく話していただいた。時間生物学会は時間を対象とする学問の一つであるが、時間を意識することはあまりない。今回の講演が、時間生物学会の会員の先生方にも、自分たちが一翼を担っている時間の研究の幅の広さと多様性を考える一助となれば、企画を立てた人間として、大きな喜びである。

企画したシンポジウム講演は、時間生物学の指導的研究者が、最先端の、もっともホットな話題について研究を紹介するシンポジウムと、若手の気鋭の研究者が、将来の方向性を自由なディスカッションの中で探ってゆこうとするワークショップの二本立てで行なった。基礎系のシンポジウムは今年、山口大学が幹事校だということや、生物時計の分子機構については大きな国際シンポジウムが行われた事も考慮して、いままでこの学会であまり取り上げられなかった光周性をテーマとして行われた。それが富岡憲治氏がオーガナイズした「季節への適応機構を探る—光周測時機構の比較生物学」である。一方、臨床系のシンポジウムは、大川匡子氏と太田龍朗氏をオーガナイザーとして、「心と生物時計」をテーマと

して行われた。リズムというある意味では基本的な機能が複雑な高次機能の複合である「心」の問題と深く結びついていることはある意味で驚きであった。ワークショップとしては基礎系が岩崎秀雄、吉村崇氏が企画した「生物リズムの理論的基礎と多様性」、臨床系が鯛岡直人氏がオーガナイズした「呼吸器領域における時間医学の臨床応用」の2つが行われた。どの会場でもこれから研究の中心になるであろうテーマの研究が語られ、時間生物学の方向性が明示された。シンポジウムの企画、構成に当たられたオーガナイザーの先生方には深く感謝しないわけにはゆかない。ただ、大会の責任者の常であるが、次々と気になることが発生し、落ち着いて、シンポジウムやワークショップに参加できなかったことが悔やまれる。

一般演題は口頭発表が40題、ポスター発表が43題であった。時間生物学会は生物リズム研究会と臨床時間生物学会が合同して作られた学会であるが、第1回の生物リズム研究会がわずか4題の講演しかなかった事を知っている者からするとこの100題近い発表数に隔世の感がある。ポスター前でも活発な議論が行われていたが、口頭発表にも多くの質問が飛び交って、大変アクティブな印象を受けた。中でも特に、生物時計の分子機構に関する研究が数も多く、内容も充実していた。ここ数年の爆発的な研究の進展が、若い研究者を惹きつけていることが実感することが出来た。それに引きくらべて、気になるところもあった。私の目にはかつて、この学会の中心であった、臨床系の研究者が時間生物学会から離れていっているような不安を持った。臨床系のセッションでは聴衆も少なく、反応も今ひと

つであったような気がしている。臨床系の研究者をもう一度時間生物学会に引き戻す努力をしなければならないことを改めて会員のみなさまに訴えたい。

山口はフランシスコ・ザビエルが滞在し、その時初めて、西洋式の時計を日本に持ち込んだ歴史を持っている。その地で、生物の時計とその臨床応用をテーマとする学会が開かれたことは何よりうれしいことであった。最後に、この学会開催に当たって、援助をいただいた山口市コンベンションビューローや、山口大学、会場を貸してくださったばるるプラザ山口の関係者に改めてお礼を申し述べたい。また、参加してくださった、すべてのみなさまの今後の発展を祈念していることを付け加えておく。